【405】

氏　名（本籍）	市原（いちはら）　学（まなぶ）（茨城県）
学位の種類	博　士（心理学）
学位記番号	博　乙　第　2292　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**数学・国語における自己調整学習モデルの検討**

主　査	筑波大学教授	教育学博士	新　井　邦二郎
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	岡　本　智　周
副　査	筑波大学講師	博士（心理学）	佐　藤　　純
副　査	筑波大学教授	教育学博士	服　部　　環

論　文　の　内　容　の　要　旨

（目的）

本研究は，学習指導実践で起こりうる問題「やる気はあるのだが，どのように勉強したらよいのかわからない」,「勉強はしているのだが, 思うような成果を上げられない」といったやる気の空回りや, 骨折り損といった現象を説明するため，自己調整学習の知見を適用してモデル構築を行った。個人の学習プロセスに関するモデルを構築する試みは 1990 年頃から盛んに行われてきた。多くの研究では，動機づけ，学習方略，それから学習成果の 3 つが取り上げられ「動機づけは学習行動を引き起こす」,「学習行動はよい学習成果を生み出す」といった知見が数多く蓄積されてきた。こうした知見は学習における動機づけや学習行動（学習方略）の重要性を示唆するものであるが，上記のようなやる気の空回りや骨折り損といった現実的な現象については等閑視されがちであった。本研究の最大の目的は，自己調整学習の立場から，やる気の空回りや骨折り損といった現象を解明することである。

（対象と方法）

小学生，中学生，高校生を対象とした。

方法は主に次のような質問紙を用いた。

① 能力の自己概念（国語，算数・数学，理科，社会）
② 成功期待（国語，数学）
③ 学習成果（国語，数学）
④ 課題価値（国語，数学）
⑤ 学習方略尺度（国語，数学）
⑥ メタ認知方略尺度（国語，数学）

これらの質問紙から得られたデータを確認的因子分析，構造方程式モデリングなどの統計的手法を用いて分析をした。

（主な結果）

メタ認知活動をあまり行わない学習者においては，動機づけ，学習方略，及び学習成果間の関係が弱い，つまりメタ認知が伴わないと，やる気の空回りや骨折り損といった現象が生じると仮定した（直線的な調整効果）が，しかし，分析の結果から，メタ認知を中程度に行う者において動機づけ，学習方略，及び学習成果間の関係が弱くなっていることがわかり，やる気の空回りや骨折り損といった現象は，メタ認知を中程度に行う者において生じていることが示唆された（曲線的な調整効果）。

（考察）

上の結果から，発達初期から使い慣れた学習方略に依存することで，ある程度は動機づけがよい学習成果をもたらすと思われる。しかしながら，メタ認知と学習成果の間にも相関関係が見られることから，メタ認知を伴わない学習活動を続けた場合にはいずれ頭打ちになることが伺える。このことから，一時的に学習の妨げになるという恐れはあるが，学習者のメタ認知活動を促していくことは，自律的な学習者となるうえでも重要なことであると考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，次のような成果を得た。

① 中学生の数学と国語に焦点を当てた学習方略尺度を作成した。

② 能力の自己概念と成功期待の概念を分離できた。

③ 学習の動機づけと学習成果の双方向の因果関係を示唆できた。

④ メタ認知を中程度に行う生徒において動機づけ，学習方略，及び学習成果間の関係が弱いことを見い出した。

以上により本研究は，教育心理学の研究を前進させ中学生の学習指導実践において役に立つ知見を提供できたと考える。しかし，個人内のプロセスの研究に留まっているので，今後，社会・文化的な要因を組み入れた研究も課題として残っている。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。